

A 指定表紙

記入日 2016 年 3月 16日

第 6 回 ESD アシストプロジェクト**助成金利用報告書** (申請年度：2014 年度、実施年度：2015 年度)

助成金利用終了後、領収書を添付し、速やかにご提出下さい。締切日は 2016 年 3 月 18 日です。

ユネスコスクール名	特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園
助成金利用額	89,629 円
キーワード (例：環境学習、人権)	「個」の育成とそれを支える教科間連携
その他添付資料 有・無	有 (詳細： 歴史ノートのコピー) ・ 無 ※授業を受けた子どもたちの感想等文があれば併せてご報告いただければ幸いです。
助成金利用に関する ご意見・ご要望があ ればお書きくださ い。	
記入責任者氏名	名前 佐藤 雅史 ⑩
連絡先	住所： 〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20 電話：045-922-3107 FAX：045-922-3107 e-mail：jimu@yokohma-steiner.jp

B 事業報告書

助成利用報告書

私たちの学園では、児童・生徒が自分自身と世界とのつながりを重層的かつ有機的に学ぶために、年齢間の連続性や教科間の関連を強く意識したカリキュラムを用いています。時間軸を通じた「縦のカリキュラム」、メイン授業と教科を横断する「横のカリキュラム」によって織り上げられた教育の営みを通し、子どもたちひとりひとりの「個」の発展が、それを見守る教員との相互作用によって、「生きたESD」を編み上げています。そこでは子どもたち自身がESDの暗示的な担い手となります。

このようにホリスティックに編成された教育からは、無尽蔵と云うるESD要素を引き出すことができます。今回はそのなかで特に「個の発達」に焦点を絞り、「個の発達 — 社会と自己 — 地球規模の自然現象と人間」というテーマによるプロジェクト助成を申請しました。具体的な教科としては、オイリュトミーと呼ばれるシュタイナー教育独自の身体芸術活動、日本史・世界史、英語、気象学という、一見、関連性の薄い活動領域ですが、今回のプロジェクト設定を通じてそれらの関連について意識化することができ、この教育活動を新しい視点から評価することができたと思います。

■オイリュトミー：個の発展の軸をつくる全人的アクティビティー

オイリュトミーはシュタイナー教育に特有の芸術科目であり、この教育のなかを貫く柱のような教育活動として位置づけられています。

身体の合理的な動きの育成に力点を置いている体操、優美さや特定のモチーフを表現することに力点を置いているダンスなどとの大きな違いは、オイリュトミーでは、人間のもっとも根源的な営みである言葉と音楽を編み上げている法則性を身体の動きによって表現するところにあります。低学年のうちはお手本としての教師の動きを素直に模倣することからはじめ、学年が上がるに連れ、次第に法則を自らの意識のなかに捉え、「意識しつつ行為し体験する」という活動に力点が置かれていきます。その意識の中心にあるものはその子ども独自の「個」であり、そのユニークな個性がオイリュトミーの動きのなかで言葉や音楽の法則と自身との調和を目指すのです。

このように、オイリュトミーにおいて中心となる課題は、普遍性をもつもの（法則性）と唯一無二であるもの（個）の調和であり、

そこから弁証法的に集団としての社会性が発展していくのです。そこで打ち立てられた調和によって支えられ、個はより確固としたものとして子どもの成長を支える柱となります。

今年度も、オイリュトミーの取り組みの中で、このような成長のドラマが無数に見出されました。とくに、今回、助成していただいた絹の布を仕立てた衣装を使い、9年生の生徒は卒業を祝う会に向けて本格的な舞台公演をつくり上げることができましたが、本物の舞台をつくる体験は生徒ひとりひとりの個の発展に大きな跳躍をもたらしたと思います。ベートーベンの大作「悲壯」を12名のアンサンブルで情感豊かに歌い上げた舞台は、観る者の心に限りなくピュアな感動を呼び起こすものでした。それは、9年という長きにわたって育まれてきた普遍性と個性との調和の上に、クラスの個性がパーフェクトに開花した瞬間でした。

この「跳躍」を少なからず支えたものが衣装でした。私たちの学園では、授業には木綿生地をつかったドレスを着用します。しかし、本格的な音楽舞台には、音楽のもつ連続性や表情をしなやかに表現できる絹が不可欠でした。生徒たちは、絹のドレスの風合いを繊細に受け取り、その軽やかさ、動きやすさに感動の声をあげ、音楽の動きに素直についてくるしなやかな「もうひとつのからだ」を楽しんでいました。絹は人間の皮膚にもっとも近い素材であり、その衣装は着る人の生命感覚を育むと言われていますが、今回の舞台はまさにそれを実証したものと思います。

■日本史／世界史：歴史的時間に投影された普遍と個のドラマ

では、オイリュトミーで育まれる普遍性と個の調和は、他教科のなかにどのように見出されるのでしょうか。学園の歴史の学びは、一見、オイリュトミーからは遠い領域のように見えます。しかし、独自の教授法や教材の扱いによって、自分自身のなかにある普遍性と個性の葛藤が、歴史の奔流のなかにも同じように見出されることを生徒たちは理解します。

学園では、日本史と世界史を並行して学習することで、世界と自国文化の照応関係を意識し、自国文化を対象化する視点へと導くようにしています。そこにも、普遍性（世界）と個性（自国文化）の構造が見出されるのです。その両者の調和こそが、歴史教育に求められる真の成果でしょう。

さらに、その時代を生きた人物が何を考え、何のために行動したのかを心の深い部分で理解するために、歴史上の事象を列挙して年

号を記憶するような方法はとらず、その時代を代表する特徴的な人物や出来事に焦点を絞りました。生徒があたかもその時代に居合わせ、その出来事を目撃していると感じられるように、教師は具体的なイメージを込めて物語るように授業を進めました。

歴史を単なる事象の連なりとしてではなく、生きた人物との関わりから生成していく命あるものと捉える視点によって、ここでも歴史という大局的な流れとそこに生きる個としての人間の葛藤と調和を生徒は見出しました。自らも歴史と関わって生きるひとりであるという自覚が、そのノートから伝わってきます。これらのノートを讀むと、事実と事実の関係性がよく理解され、その時代ごとの人々の心情への共感があり、歴史とは何であるのかを彼らはよく理解していると思います。表層に留まらないその歴史体験から、人間の理想とは何かを感じ取り、悲惨な歴史に出会っても悲観することなく、ポジティブに社会正義と公正の理想に向かおうとする気持ちが育まれていることが伝わってきました。調べ学習では、大勢の聴衆を前に発表を行い、自分の言葉で語ることでさらに歴史が身近になったようです。

上記のような手法を採っているため、今回、助成していただいた歴史百科事典は、もっぱら教員の仕込みのために使わせていただきました。教員は授業準備に多くの時間と手間をかけるため、資料を常時手元に置いておけることはたいへんありがたいことでした。なお、世界地理では事典を用い、世界遺産、料理といった親しみやすいトピックについて、詳しく学べたことで、各国への興味が広がりました。料理部ではそれを参考に何カ国かの料理を調べて、実際につくって試食を行いました。

■英語科：自国文化を対象化する学び

オイリュトミーの体験は英語科の授業（1年生から英語と中国語の2か国語を学んでいる）のなかにも照応関係を見出すことができます。それを見ていく前に、学園のカリキュラム全体が自国文化の生き生きとした学びに貫かれていることが英語科の学びの前提としてあることに触れておきたいと思います。

1年生、2年生での文字の学び（たっぷり時間をかけ文字の発生プロセスを学ぶ）から始めて、3年生では稲作や家づくり体験を中心に生活の営みを支える文化の学びがあり、4年生の郷土学、5年生から始まる日本史へとつながってゆきます。このように、自国文化を深く理解していくためのひとつながりの学びをかたちづくる独自カリ

キュラムにより、ESD の要である自国文化理解を自然に実現しています。

学園の高学年の英語科では言語を通じた異文化理解の課題に取り組みますが、上記のような自国文化の重層的な学びがそれに先行することで、文化的アイデンティティーがしっかりと育まれた上での学びであることを強調したいと思います。異文化理解とは、自国文化を背景とした文化的アイデンティティーを相対化する作業であり、そこで自分自身の文化的アイデンティティーを明快に意識化していくためには、核となる「個」がしっかりと文化に根を張っていることが必要だからです。

英語文化を背景にもつゲスト講師マイケル・リッチさん（横浜桐蔭大学講師）の授業では、身体を動かしながらのゲームから始まって、「イギリス」のイメージ、そしてミックさんが日本に来て困ったことは何かを生徒たちに考えさせ、英語での質疑応答を行いました。普段当り前に感じていることが、言葉が分からないとどのように感じるのかということを、生徒たちは実感した様子でした。例えば、自動販売機で飲み物を選ぶときに、書いてある文字が読めないとどうなのか。また、お風呂に入るときのマナーの違いや、混み合った電車の体験が外国から来た人にとってどのような体験なのかなど、異文化について生徒たちに身近で具体的な例をあげながら、分かりやすく体験できました。

他にも、英語での電気物理の授業や国際的なライアー奏者との交流、オーストラリアの生徒たちとの交流、アジア地域の国際会議の参加者を英語や中国語でホストする体験など、自他の違いを意識することで自己を再確認する体験を積み重ねることができました。

今回助成いただいた英語辞書は、主に海外との文通に用いました。6、7年生の英語授業では、海外の3校の学校と英語による文通を行いました。互いの家族、趣味などの話題から始まって、学校や社会、文化的な違いなどへの気づきにつながるような活動ができたと思います。

■気象学：感覚を超えた事象とつながっていく学び

これまで見てきたように、学園の学びは、「個」の発展を核にしなが、時間軸と空間軸の両方向に枝葉のように広がっています。8、9年生ではさらに、これまで獲得してきた思考の力をフルに働かせて、五感だけでは捉えきれない小さな、あるいは大きな事象を捉えていく学びとして、物理学や気象学への取り組みが本格化します。

この領域では理念世界としての普遍性と個の関係が鮮明に浮かび上がります。

今回助成いただいた風向計、気圧計は気象学の学びに用いました。気象の変化を数値に変換し、その変化を思考の力で大きな事象を把握するイメージにしていくことで、わたしたちが暮らす四季の移り変わりに富んだ地球の生きた姿をつかむことを目指しました。その作業は生徒たちには難しい面もあったようですが、色を付けた温水と冷水を使った前線の実験や、容器にかけた圧を一気に減圧する雲の発生実験では生徒たちから歓声があがり、地球規模の事象理解への布石が敷かれたと思います。

■まとめ

以上のように、今回のプロジェクトの個々の要素はたいへん充実したものとなり、その成果は9年生の濃密な卒業に向けたプロジェクトの数々に、目に見えるかたちに統合され、結実しました。

プロジェクトの個々の教科の成果についての共有は、週に1回開かれる教員会議や専科会を通して行う予定でしたが、実際には、ぎっしり詰まった会議のなかで本プロジェクトの課題を明確に意識した共有作業を行うことは困難でした。しかしながら、そもそもプロジェクト全体が通常行われているカリキュラムの再評価という趣旨をもっていましたので、事後調査を通して十分に実りある評価ができたと思います。

ここにまとめた評価をふり返ってみると、あらためて学園のカリキュラムがよく機能していることが明らかになり、このカリキュラムを充実させていくことが私たちのESDの目標のひとつであることが明確になったと思います。このような機会をいただけたことに感謝申し上げるとともに、この報告をESD発展のためにお役立ていただけるようお願いする次第です。